



Toneyama Kojin

第127号 2025年9月1日

記念美術館通信

Memorial Art Museum News Letter

〒024-0043 岩手県北上市立花15-153-2

TEL/FAX 0197-65-1808

essay

教育者としての池田先生



令和7年度後期企画展

11月24日(月)まで開催中

画家の流儀
池田次男展

キャラコという布を張った100号サイズのベニヤ板のパネルボードにシャカシャカと油絵の具をのせていた私の横からニコニコしながら木炭を持った池田先生が現れ、バツバツ！と太い黒の線を引いて行かれた。問答無用であった。高校美術展に向けて、初めての大作を描いていた美術部員だった私の原体験である。

県立黒沢尻北高校美術部の仲間たちはある休日、二枚橋の池田アトリエに先生を訪ねて行った。先生の提案で昼食はひつまみパーティーとなった。先生がどこからかデカイブリキの缶(!?)を持ち出して、それを鍋にしてひつまみを作ってみんなでつついた。ひつまみはうまかったが、どういうわけかみんなの舌が黒ずんでいた。どうやらブリキ缶に変なものまじっていたようで…。「ま、いいや。」と不思議に大らかな時代のこと。先生はというと豪快に笑っていたような記憶がある。

先生に勧められて美術系の進学を果たした美術部の先輩方が多かった。池田先生がいなければ美術の道には進んでいなかったと口々に言う。私もその一人で、「やるなら東京！」と強く背中を押された。その後も個人的に二枚橋のアトリエをたびたび訪れた。クソ真面目に制作上の悩みや技術的な課題をぶつけてみたりしたが、気が付いたら飲みながらどうでもいい世間話で笑い合っていた。

2011(H23)年、教え子二人で二人展を開催した。「先生の13回忌を翌年に控え黒北美術部OB展を開催したい。まず、その起点となる二人展を。」と、一つ下の彫刻家、松川善光君が私を誘ってくれた。パリに在住し画家として活躍する先輩、茨城の現代美術家の先輩、地元中学、高校の美術教員の先輩・同輩らも参加するこのOB展は4回ほど継続し、定期的に恩師、池田次男を偲ぶ会にもなっている。



池田次男《陽だまり》油彩、1978年

先生を慕う仲間たちが口にするのは、決して美術に関する内容などではなく、先生の大らかな人間的魅力だった。先生のアトリエに入れば今、どこへ向かっているのかは肌で感じ取れる。個展開催中の銀座のギャラリーでも、社会人となった我々との距離は「ひつまみパーティー」の頃と何ら変わりようがないのである。

その先生がボク達のまえからフッと消えて25年、四半世紀となる。早いものだ。気が付くと今、私も先生が逝った年齢を迎えている。

ご逝去後も多くの回顧展が開かれ、評論や記事でもその業績が振り返られ、再評価にもつながっている。しかし、こうした教え子の証言は多分、今までなかっただろう——と、こんな文を書いてみました。私も先生のおかげで絵を描きながらこんな仕事をしています。(専任研究員 菊地仁美)

終了

中期企画展

孤高の画家

川村勇展

～川村美術館との交流企画展を通して～

8月24日をもって中期企画展「孤高の画家 川村勇展」が終了しました。以前に西和賀町の川村美術館を訪れたことがある方も来館し、「展示場所を変えて改めて観覧し、初めて見るような新鮮な感動を覚えた。」と語っていました。

また、今回は交流企画展ということで、当市所蔵の利根山作品16点を川村美術館内に展示していただきました。

絵画というものは観る時期や場所により感じ方が違うことがあります。観覧者の環境や感性の変化などが鑑賞眼を深化させるものと思われます。作家の新旧に関わらず、ギャラリーに足を運ぶことは、その時の自分の感性を確認する意味で貴重な機会ではないでしょうか。今回の企画展は東西の交流企画展という形で開催されました。北上・和賀地区の両サイドに位置する「日本でも有数の小さな美術館」同士のコラボレーションで、地域の文化の豊かさを体感していただけたのであれば幸いです。



川村美術館の展示風景

【前回第126号からの続き】

いずれも誰かが勝手に置いていったわけではなく、実績のある芸術家が制作し、その地の関係者が公共の手続きを経て設置した由緒正しい作品である。通常、その地に置かれた縁や意味があり、そういった点も含めて鑑賞するのが理想的だろう。美術館やギャラリーだけが美術鑑賞の場ではない。街にいつでも無料で鑑賞できるパブリックアートがある文化的環境を私たちは今一度見直してみても良いと思う。

「タダで観られるけど、タダならぬアート」とは『パブリックアート入門』（イースト・プレス、2023）を著した浦島茂世氏の言であるが、それがパブリックアートである。以下同書を参照しつつ述べていくが、パブリックアート（以下P.A.）の歴史をひもとくと、それはラスコー洞窟の壁画にまで行き着くかもしれない。概念と言葉は1960年代のアメリカで生まれたとされる。1929年の世界恐慌後の大規模な公共事業への投資に伴い、芸術文化への資金投入が行われ、ポスターや壁画、絵画が公共事業としてアーティストに発注されたことが起源とされる。

日本の歴史で見るとP.A.の成り立ちはまた異なり、独自の銅像制作がその起源と言えるようである。信仰に結び付いた仏像文化や狛犬、お地蔵様、道祖神などはかなり古くからあったものの、人物像を作り外に置く文化は近代（明治以降）のものであり、その人物の功績を顕彰するという目的を持ったものだった。北上で言えば展勝地の祖、澤藤幸治像がこれにあたる。

全国各地には様々な銅像が作られ、銅像マニアまで続々と誕生したほどだったが、銅像であふれかえった街から一挙に銅像が消えたのは、第二次大戦中の物資不足から金属供出により、多くの銅像が回収されて溶かされ、飛行機や機関車などに変えられたから、ということである。【次号へ続く】



展勝地公園内にある
澤藤幸治像（筆者撮影）

恒例!美術館まつり 9月13日(土)開催

今年も子ども向けのアートイベント・美術館まつりを開催します。

ワークショップ「リトル・モンスターをつくろう」も実施。講師は昨年度に引き続き、作家の宮嶋結香さんをお迎えします。一部事前申し込みが必要なものもあります。詳細はホームページをご覧ください。



絵画教室終了



絵画教室修了作品展

9月20日～10月3日 於:生涯学習センター

4月から全10回にわたる講習を終えた今年度の受講生たち。デッサンに始まり、水彩画や油彩画など各自3点の作品を完成させました。以下、受講生の感想です。

- ・楽しく描くことができました。色々ご指導いただき、自分だけでは気づかないことに気づかされたりととても勉強になりました。今後も楽しく絵を描いていければと思います。
- ・絵を描き始めると日常の中で目に映るものに対する視点が変わります。日常がとても興味深く、物をじっくりと観察するようになり、世界が広がって鮮やかに感じられるようになりました。他の方々のさまざまな表現にも刺激を受けました。
- ・先生のアドバイスや周りの方々の描き方を見ることで作品として完成することができました。水彩画の彩色での不安は大きかったのですが、思い切って全体を塗る場面と細かく描いていく場面があることや色の作り方など学ぶことは多く、描くことが楽しくなりました。